
神々の賽

~対の女神~

トワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の賽　～対の女神～

【NZコード】

N1249W

【作者名】

トワ

【あらすじ】

列強ひしめく大陸の中でも、最大最強を誇るレナー＝王国。

そこにはかつて『シャンキルの女神』と謳われた美貌の王女がいた。その王女を母に持つ、フィアナとアルティナ。双子の姉妹は、母と同じ予言をあたえられたことから、人目から隠されていた。年頃になつた彼女たちを待ち受ける、運命と恋　　のお話です。

プロローグ

「殺してしまいましょ！」

まるで野花でも摘みに行くような軽やかさで、男はいった。

室内が一気に緊張する。

それまで、空気の重さに耐えかねてか、感情を晒すことを恐れてか、あるいはその両方か、瞼を閉じていた男たちは、殴られでもしたように一齊に目を開けた。その色がそれ異なるように、男たちの瞳はそれぞれの感情をのせていく。ただ、向かう先は同じだった。

怒り、驚き、不安といった負の感情を一身に集めた男は、萎縮するどころか逆に、それを待っていたようだった。

「さすれば、憂いは消えます」

男の声は穏やかだった。

しかしその発言は、穏やかならぬ空氣を呼んだ。

「まう、たいしたものだ。災いになるやもしれんというだけで、まだ田も開いておらぬ赤子を殺すか」

侮蔑を含んだ声でそう言った男は、田に怒氣と殺氣をみなぎらせていた。

戦場でしか見られない男のその気配に、あるものは臆し、あるものは不安の色を見せていくといふのに、射殺すような田に見据えられても、対する男はまったく動じなかつた。

「さようです。確かに、災いになるかならないか、いまはわかりません。ならなければ結構。ですが、なつたとき、どうなせりますか？ われらはすでにそれを経験しております」

怒氣を隠さぬ男が、苦い事実を聞かされて眉間に皺を寄せた。

「それに……生きたとしても、お幸せにはなれません

「なぜ、やういい切れる

「たとえ災いにならずとも、災いになるかもしれぬといつだけ、われらが国と民には不安が付きまとつことでしょう。その存在が、忌まれ遠ざけられるは必至。災いになればそれこそ、あのとき殺しておけばよかつたと思われるのです。どちらにしても、お氣の毒ではありませんか？」

「それが殺す理由になると想つのか？」

「十分かと……」

平凡といい放つ男に、眉間に深い皺を刻んだ男は、抑えた声で訊ねた。

「田歩譲つて受け容れたとして。……誰が手を下すんだ？ 僕か？ それとも何も知らない奴にやらせるか？ 誰が、赤子殺しの罪を背負うんだ？」

「お許しがでれば、わたくしが……」

「貴様、正氣か？」

「無論」

「ひとではないな。ひとの成りをしているが、貴様はひとではない」

「これは……国の未来を背負つて立つお方の言葉とは思えませんな」

それまで、春風のように穏やかだった男の声はいま、濃い嘲りを含んでいた。

「ひとであることに固執して、成すべきことを拒否なれる、か。ご自身は守れても、国は守れんでしょうな」

「黙れー。」のくせがきがー！」

それを聞いた男は、もはや怒りを抑えることを止めたようだつた。

怒声とともに、椅子を後ろへ蹴り倒す。

全身から怒りを放出させた男は、大またで男に歩み寄ると、その胸倉を掴んだ。

「阿呆がわかつた風な口を利くんじゃねえよー。罪もねえ子供を殺して国が助かるか？ どの面下げてお前は自分の子供に会うんだ？ 赤ん坊を殺した手で、ガキの頭を撫でんのか？ 神の前でなんていうんだ？ すべては国のためにした、とでもいう気か？ そんな薄汚い野郎がのさばる国を、神々が祝福すると思うか？ そう思つてんならお前は馬鹿だ。とんでもない大馬鹿だ。いいか？ お前は国を守るんじゃねえ、滅ぼそうとしてるんだよ。お前みたいな野郎が国を腐らせてくんだよ。つまんねえ占いだか予言だかに振り回されやがつて」

「やめよ」

鋭い叱咤の声が、激情に染まる空氣を切り裂いた。

男が、怒りで底光りする目を、横槍を入れた相手に向ける。穿つような視線を向けられた相手は、怯むどころか逆に、鋭い目で男を睨み返した。

「やめよ。陛下の御前である。やのへりこむしておけ」

いわれた男は「ちつ」と舌打ちし、胸倉から手を離した。

室内は、ようやく静けさを取り戻した。が、緊張は増すばかりだ

つた。

諍いをとめた男が、意識と視線を横に滑らせる。そこには、男が忠誠を誓い、唯一膝を折る人物が座っている。逞しい体躯に、獅子のたてがみを思わせる頭髪。王者と呼ぶにふさわしい威厳と風格を備えた主はいま、何者をも従わせる紫の瞳を隠していた。

「陛下……」

重々しい声で男はいった。

すべての視線が主に集中する。しかし、主は微動だにしない。

「……」決断を

促す男の声に、主はよつやく反応した。
固く閉じられていた瞼が開く。

主の瞳が示すのはどちらなのか

男たちがそれを確かめる前に、言が落とされた。それは短く、抗えない強さでもって、男たちの前に放たれた。

プロローグ（後書き）

まことに、お詫びいたします。

「まつたく、お前は 気が小さいにもほどがあります。やられた
らやり返すくらいの気概を持ちなさい。これだけ立派な体をしてい
て、いったい何を恐れるというのです」

若い女は憤りを隠さず、身の丈を越す相手を叱りつけていた。
優しげな風貌をしているが、白い肌には薄く朱がさし、淡い緑の瞳
にきらきらと、怒りと陽光を反射させていた。

「オーカー、聞いてるの？」

「……」

感情あらわな瞳をひたと向けられている相手は、黒曜石のような
つぶらな瞳を彼女から逸らすばかりだった。

「まあ、こまに始まつたことではあつませんが……」

その様子を遠目から見ていたサラは、ため息とともに口にした。

「馬を相手に説教とは、わが姉ながら」

「尊敬する？」

サラは横を向き、言葉を継いだ人物に目を移した。それまで人馬のやりとりを見ていた紫水晶のような瞳が、いたずらな光をたたえたまま、サラに向いていた。サラは目線をわずかに下げ、微笑んだ。つややかでゆるく波打つ黒髪が、敷布の上に広がっている。彼女の主は、片腕を枕に寝転んでいた。

「フィアナ様、少々違います。見上げたもの、とでもいいましょうか。無駄を承知であるようなこと、わたしにはとうてい真似できません。まあ、真似たいとも思いませんが……」

呆れるような、諦めたようなサラの声に、

「ふふっ」

という笑い声が重なった。

「アルティナ様？」

サラはいまひとりの主、アルティナを見た。寝転ぶフィアナのすぐ傍らで、片膝を立てて座っている。双子の姉フィアナとは対照的な、まばゆいばかりの金髪が、その背中で揺れていた。

「ティア？」

フィアナが双子の妹に紫の瞳を向ける。

アルティナが応えるように、深緑の瞳を合わせた。

「心配だわ。オルガつたら、そのうち壁や柱にまでお説教するようになるんじゃないから？」

露ほどの不安もない声でアルティナがそういうと、三人は一緒になつて笑った。

「まあ、その心配は先に置いておくとして……」

フィアナが笑顔のまま、視線を人馬に向ける。

「そうね、オルガの気持ちもわかるけど、あれでは逆効果ね」

アルティナが頷くと同時に、ファイアナは立ち上がった。

「オルガ！ お説教はそれくらいにして、こいつにいらっしゃい！」

「オーカーときたら、本当に歯がゆくて仕方ありません。素晴らしい脚と体に恵まれているといつのに、あの臆病さゆえ、すべて持ち腐れです」

オルガは悔しさを滲ませる。

一方、お説教から解放された馬はいま、緑豊かな広大な敷地を駆け回っていた。気ままに緩急をつけ、あたりを走り回るさまは、力強く優雅であつた。

「さすが、シスタ産の名馬ですわね」

サラが感心したように声を上げる。

「そうね。ああして走り回つていると、スレイプニールとグレイプニルとそう変わらないわね。ちょっと神経質で、ずいぶん臆病なだけでしょう？」

と笑いかける黒髪の主を、オルガは恨めしげに睨んだ。

「それが大層厄介なのでございます。人見知りはする、知らない人間を怖がる、果ては犬まで怖がる始末。これでは使い物になりませんでしょ？」

「どうして？ オルガには慣れているし、ちゃんと乗せてくれるじゃないの。わたしなんか近づくと、いまでも田を逸らされるわよ。ねえ？ ティア」

「そうよ、オルガ。それに、初めて来たときのことを思えば、格段の進歩だわ。ゆっくり色々なことを覚えさせればいいわ」

アルティナの言葉に、サラが思い出したように笑った。

「あれは貴重な体験でしたわ。失神しそうになつた馬、というのを初めて見ました。いきなり脚から崩れてゆくので、毒でも盛られたのかと心配しましたけど……それが緊張からだとは、思いもしませんでしたわ」

「皆そつよ」

その後の喧騒を思い出したのか、フィアナが微笑んだ。

「ほんと、あのときから比べれば大した進歩だわ。オルガ、慣れよ、慣れ。時間をかけて、あらゆることに慣れさせていくしかないわ。頑張りなさい」

「フィアナ様もアルティナ様も、他人事だと思って」

『『だつて、オーカーはオルガの馬でしょ』』

双子の主はくるりと瞳を輝かせ、同音同句にそういった。

「使い物になるのにいつたいどれくらい時間がかかるのか、考えるのも空しいですわ」

憂鬱そうにいうオルガは、次の瞬間、はたと気付いたように顔を上げた。

「だいたい、わたしの仕事はおふたりのお世話であつて、馬の世話ではありません」

「お小さい頃ならそうでしょうけど、早や、十七になられたフイアナ様とアルティナ様は、もう手もかからないでしょう？」

「何をいつてるのー？」

オルガは妹をきつと睨みつけ、次いでふたりの主に向かってじつくりと見つめ、眉間に皺を寄せながら、おもむろに口を開いた。

「フイアナ様！ なんですか、その格好は。アルティナ様もです！ 男のよう片足を立てて座るなど、市井の娘でもそのような恥ずかしい格好はいたしませんよ。そろいもそろいつてまあ。王族の令嬢がそのようにはしたなく、だらしのない姿を晒してはなりません」

にわかに自分の仕事を思い出したオルガは、馬に向かうときよつと厳しくふたりの主を戒めた。

「ここにはだれも入つてこられないから大丈夫よ」などと「おうものなら、「内での齧いが外に出るのです。いつたい何度いえばわかるのです」と返つてくるのは間違いない。聞くこと数千回を下らないうこの言葉を避けるため、ふたりはおとなしく従つた。

居すまいを正す主たちを見届けると、オルガはその丞先を妹に向けた。

「サラ、お前もお前です。己の務めを果たさなければ駄目でしょう

」

フィアナとアルティナは顔を見合させ、おどけるように肩をすくめた。

「よろしいですか、緊張感をお持ち下さい」

常に、どこかに、人の目があり、耳があるとお思いください

いつものように、説教のくくりの文句に差し掛けたときだつた。オルガが突然立ち上がり、森に向かつて怒鳴りつけた。

「ダブル！ お前は何を食べているの！」

いいながら、急ぎ足で森の中へ入つてゆく。

「まあ……いいところだといふのに、姉さんも忙しい」と

サラは氣の毒そうにその後姿を見送り、フィアナとアルティナは身を乗り出し、木陰に見え隠れする人馬を探した。

馬は、ところどころに大きな白い花をつけた、濃い緑の葉を繁らせる木に顔を突っ込んでいた。熱心になにやら食はていたが、ピクリと耳をふるわせたかと思うと、繁みから顔を引き抜いた。そしてオルガを見つけるなり、彼女に突進してきた。

それは一見、襲われるのではないか と知らぬものに誤解を抱かせる勢いであつたが、馬は脚力の強さを見せつけるように急停止すると、オルガの顔に自分の長い顔をこすり付けた。

オルガはよろめいたものの、踏ん張りながら、人懐こい葦毛の馬の首を撫でてやつた。それから、長い顔を自分に向かせ、しかめ面を作つた。

「うひ。なんでもかんでも口に付くものを食べてはいけませんといつてるでしょう？ 毒でもあつたひびつするの？」

馬は白い花を食はんでいたのだった。

「お前はほんとうによく食べるわね」

アルティナはその食欲を感心しながら、三つ目のつるんを頬張るダブールの背を撫でた。

葦毛の馬は、大好きなりんをもらった上、撫でられて大層満悦の様子である。

「なんでもかんでも食べすぎです」

オルガは苦い顔をする。

「十分に餌を与えているというのに、他の馬の餌を横取りする、人にはねだる、外へ出れば目に付くものを食べるなど まったく、その食い意地をなんとかなさい。そのうち毒にあたつて死んでしまうわよ」

心配からくるオルガの説教を、ダブールは聞いているのかいないのか。

栄養たっぷり、他の馬に比べてふた周りほど立派に育った馬は、『もう一個、もう一個』と太い首を使って、アルティナにねだつていた。

「そんなに食べたらお腹をこわしますよー!」

おねだりが成功したダブルを見て、オルガは声を張り上げた。

「アルティナ様も、そう簡単にお与えにならないでください」

「『めんなさい。でもダブルには勝てないわ』

ダブルには、巨体に似合わぬ可愛さと、人懐っこいや、という強力な武器があつた。
だがオルガにいわせると、その武器も表現が変わる。

「ダブルの図々しさの五分の一でもいいですから、オーカーに分けてやれませんかしら?」

「それは無理というもののよ、姉さん」

間髪をいれずに答えたサラは、オルガに睨まれた。
フィアナが笑つた。

「お前も心配が絶えないわね、オルガ」

「まったくですわ。そもそもこの一頭は、フィアナ様とアルティナ様に献上されたというのに、どうしてわたくしが面倒をみなければいけませんの?」

「フィアナとアルティナは、『何をいまさら?』という顔をオルガに向けた。答えたのはサラだった。

「フィアナ様にはスレイプニル、アルティナ様にはグレイプニルと、ご乗馬がおありますもの。他のものも乗馬は決まっていますし、エマンやラリサには、オーカーとダブルはまだ扱いきれないでしょう? なんといっても癖が強すぎますから」

「そんなことは百も承知だつた。ただ、愚痴ることで発散させたかっただけなのだが、オルガは、続くサラの言葉で渋面をつくることになった。

「それに、親の尻拭いは、子がしませんとね?」

「どこでどう探してくるのか知らないが、オルガとサラの父は、とんでもない馬を見つけてきては、娘の主たちに献上するのだった。

並みの馬では、彼女たちの主には物足りないだろう

といひ、まつたくもつて余計なお世話を、言に違えず実行している。扱いにくく、一癖も二癖もある馬を連れてくるのだ。しかも騎乗困難な名馬であることが多く、そのことがオルガとサラを悩ませていた。

主や同僚たちの乗馬にするには、あまりに危険である。野に放つことも考えたが、名馬ゆえそれも惜しく、なにより、ひとに危害を『』えるだろうそちらの不安の方が大きかった。

結局、主たちの住まいが、豊かな森を抱えるかつて王家の狩猟場であったため、その広大な敷地で放し飼いにすることにした。ところが、結果は思いもよらないことになる。手に負えない危険な馬の一、一を争つ一頭が、ふたりの主、フィアナとアルティナの乗馬となってしまった。

「とんでもない！」

オルガを筆頭に、多くのものが口をそろえて反対したが、

「だつて、しょうがないでじょ？ 乗れというのだもの……」

フィアナとアルティナ、乗り手の意思ではなく、それは馬の意思だつた。

ひとの一人や二人は蹴り殺していく、見るからに癪気の強い

獰猛なスレイプニルと、倣岸さを内に隠し、思わぬところで獰猛の牙を剥ぐグレイプニルの一頭の馬は、ことある毎に彼女たちの大物を乗り手に選んだのだった。

これで、主の命令に従うならまだ可愛げもあるが、乗つても指示は聞かず、しかも気が向いたときにしか主を乗せない。というだけでは飽き足らず、主が他の馬に乗ることを許さなかつた。人と馬の主従関係を逆転させるという、まさにとんでもない一頭だった。

オルガは主から一頭を取り上げたかつたが、歯を剥き、前肢を上げて威嚇してくるスレイプニルなど、近づくこともままならない。

『フイアナ様とアルティナ様に傷をつけようものなら、我が身と引き換えにしても必ず始末する』

と、オルガは心ひそかに固く決意したものである。
その決意のほどが相手に伝わつたのか、オルガと、この一頭の馬の関係は最悪だつた。

スレイプニルとグレイプニル、それだけでもう十分であるのに、ぽつぽつとではあるが、いまだ馬を連れてくる父に、オルガは怒りさえ覚えていた。これ以上、主や同僚の手を煩わせることはできない。オルガとサラで面倒を見るしかなかつた。

「まつたく、とんでもない馬ばかりよ」して。何を考えているのか
しら？」

「何も考えてないんじゃない？ 父さんは」

「あー、何か粗相でもして、お役を取り上げてもうまいのかしら？」

遠い空を見上げてオルガが「う」と、サラも倣つように顔を上げた。

「それくらいで止めるひとじゃないでしょ？ 大病にかかるか、
刺されでもすれば別でしょ？」

「やうねえ……」

と、相槌をうちかけたオルガは、勢い首を横に振った。

「ああ、駄目駄目、いまは駄目よ」

「ああ、やうでしたわね」

「使者としての務めを果たしてもうひとつからでないと
」

「お前たち、いい加減にしてちょうだい」

遠い空を見やつたまま交わされる、侍女姉妹のひどい会話にて、たまらず、といった様子でフィアナとアルティナが噴きだした。

「親のことをそんな風にいうなんて。ほんとうに何かあつたらいひつするの?」

「何かあれば、心配もしまじょつが……」

父の姿を思い浮かべているのか、オルガの顔は渋い。

「さようです。わわらの父は、死神にも見放されておりますゆえ、多少呪まじないをかけたところでピクともしませんわ」

「大事な娘に面倒を押し付けているのですから、これくらいいわなければ割に合いません。天上の神々もお許しくださいます」

サラは平然と、オルガは自信たっぷりにいい切つた。

「まつたく、お前たちは

諫めることを諦めたフィアナとアルティナは、苦笑いを空に向ける

た。

オルガとサラも、同じ空の先を見上げる。澄みわたった空の彼方。その下に、彼女たちの父がいる。

「 そろそろ着く頃かしり?」

「 そうね、シャンキルを出て十日だから、もつ着いてるかもしだいわね」

オルガは答えると、黙つたまま彼方を見つめる主たちに問つた。

「 い」心配ですか?」

オルガは、主たちの心の中にあるものを知つてゐる。サラも当然知つていた。

「 い」心配は無用です。グレン様は吉報を携えてお戻りになります

「 そろかしら? と深緑の瞳が揺れるのを見て、サラは続けた。

「 われらの師がそう決めたのです。覆ることがあると思いますか?」

カラのやの言葉に、主たちは微笑んだ。

「おふたりは心配などなさい、ただお待ちになるだけよいのです」

「さようです。ただし いい子にしていただかないと、お話を返してしまこましてよ」

幼子を齎すよつていうオルガに、フィアナとアルティナは破顔した。

『もちろん、いい子にしてるわ』

「大変結構です。では、そろそろ屋敷に戻りましょうか」

「ええっ、もう?」

「なんですか? いい子にしてくださいのではなかつたのですか?」

『あら、わたしたちはいつもいい子にしていてよ?』

「いい子であれば、侍女の手を煩わせず、素直にお聞き入れくださいるはず。だいたい、目を離すとたちまち姿をくらまして、侍女に心配をかけるなど、とてもいい子とは思えません。まだまだにじぎいます」

「オルガは大きさねえ。そんなこと、たまにしかないじゃないの」

「やうよ。」の間のは不可抗力だつたし」

「ねえ？ それに、オーカーやダブルに比べたら、わたしたちは
ずいぶんとましでしよう？」

「馬と比べてどうなさいます！」

サラは、長くなりそうな主たちの会話を尻目に、ひとり後片付け
に取り掛かった。

1 口常（後書き）

王道恋愛めざしてます。遅筆なため、更新は……遅い」とだけは請け合いです。

ああ、書くのって難しい、と実感する日々です。

大陸の北東に位置するバルダ王国は、春とともに西からの使者を迎えた。

「これはなんと……」

「じつやら、時候の挨拶ではないようですね……」

国境沿いの小高い丘で、その来訪を待ち構えていたバルダの宰相と直臣は、驚きを抑えきれずにそういった。

親密というほど深くなく、さりとて、ひと吹きで消えてしまうような、頼りなく浅い付き合いでもない。互いの国を尊重し、一定の距離を保つた両国は、年に一、二度、互いに使者を行き交わすことを数十年にわたり続けていた。使者は数十人。バルダに遣わされる使者も、百を超えることはなかった。

それがいま、彼らが丘にしているのは、ゆうに三千を越すだろう、軍容を整えた騎兵の一団であった。眼下に見える、西からバルダへ向かう道は、黒に近い灰色の甲冑で埋め尽くされている。訓練が行き届いているに違いない隊列には、一絲の乱れもなかつた。

穏やかな春の日差しを不穏な鉄色に変化させる来訪者たちを、バルダの一団は、心中に不安を広げながら眺めていた。

すると、それまで規律を保っていた隊列が、にわかに崩れた。

先頭の一団から、四つの影が飛び出す。人馬一体となつた四つの塊は、見事な手綱さばきで、一気に丘を駆け上つてきた。

出迎えるバルダの一一行は、驚きの覚めやらぬ目で彼らを見つめた。

歩調を緩めた人馬が、バルダの出迎えのもとに近づいてくる。

先頭に並び立つふたりは、目にまぶしい金髪と銀髪の青年であり、続くふたりは、黒髪と赤茶けた頭髪の、威風漂う壯年の男たちであった。

ゆっくり歩を進め、互いの顔が確認できる距離までやつてくると、青年たちは馬を止め、後続者たちに道を譲つた。壯年の男たちは、金髪と銀髪の青年を脇に従えたかたちで馬を止めた。

バルダの宰相は驚きを通り越し、緊張していた。

己が正面に並び立つ男たちが、だれであるかを、彼は知っていた。四人の中でただひとり、軍装に身を包んだ偉丈夫が、大陸に並ぶものなしといわれる剛勇の将であり、その隣に立つ黒衣黒髪の男が、ひと目見れば忘れられない冷酷な黒の瞳から、黒の宰相と呼ばれていることを。そして彼らが、大陸最大最強の国 レナー・テを支える一大柱であることを、彼は知っていたのだった。

準備と覚悟もなく彼らと向き合つことになつたバルダの宰相は、固唾を呑んだ。

乾いた唇を押し開く その前に、レナー・テの宰相が引き結んでいた唇を解いた。

「わが名はグレン。レナー・テ王国宰相を務めるもの 」

まさか……という思いで見つめていたバルダの一一行は、息を呑んだ。うろたえ泳ぎそうになる田を堪えるのが、彼らには精一杯だった。

「わが主、国王アルグレイブ陛下の命により、かくは参上いたした。バルダ国王カルスナム陛下と、王太子ソヴィト殿下に田どおりしたい

抑揚に欠けた声は低く重く、有無をいわせぬ力があつた。

バルダの宰相は、いまだ緊張が解けない己の内に、暗い不安が広がつていくを感じた。

バルダの王都エレヤは、驚きと歓声でもってレナーテの使者を迎えた。大陸に響きわたるレナーテ軍の勇壮をひと目見ようと、沿道には多くの人々が集まっている。

バルダの民は軍装の使者を、バルダとレナーテが絆を深めたその証である、と考えたようだつた。

無論、そんな事実はない。エレヤの都は喜びに騒いでいたが、王宮内は混乱していた。

「どういふことだ？ これみよがしに兵を率いてくるなど。レナーテは何を考えておるのだ？」

「それも宰相と大將軍、両者揃つてのお出ましだ。ブルヌ宰相が顔をこわばらせておつたわ」

「それはそうであろう。聞けば、黒の宰相殿は挨拶もなしにいきなり、陛下と殿下に会わせるとブルヌ殿に迫つたらしく」

「ほう、嬉しい事実だな。レナーテが驕りを見せるか……」

謁見の間に隣接する控えの間。

急速そこに集められたバルダの臣たちは、わずかな時間を利用し、情報と心情を交換していた。十を数える男たちは、武人に文人、

年齢も装つも様々である。ただひとつ共通しているのは、彼らはバルダを担つ高官たちである、といつことだつた。一堂に会した彼らは、憚ることなく発言し、状況を見極めよつとしていた。

「何をかはわからんが、レナーーテがわれらに呑ませよつところのは確かなよつだな。しかも力ずくで」

「少々騒ぎではないか？　たかだか三千五百で何ができる？」

「うぬは阿呆か？　田の前にあるのは三千でも、レナーーテの本国には十万を越す兵がいることを忘れたか？」

「正確には十一万だな。しかも騎兵だけだ。全軍となると、三十万は固い。そんな相手と事を構えようとするのは、愚かといつしかないな。しかし、唯々諾々と従つわけにもいかんな。われらにも矜持がある」

「先走るな。どのよつな話かまだ聞いてもおらぬとこつの」。レナーテ国王のお人柄は、そなたらも知つておらぬ。彼の方は、われらに難題を押し付けるよつなおひとではない

「無論、賢王アルグレイブ陛下のことは存じております。だからこそ、ではありませんか？　あの方が、友好国に武威でもつて示されるよつなことをなさいますかな？」

「えよ。われらの不安はそこにある

「おひとが変わられたか？」

「賢王といえど、不老不死ではないからな。身体も衰えれば、心も衰えるだらうや」

「しかし、まだ六十を過ぎたくらいではなかつたか?」

「ああ。戴冠四十年の大祭が少し前にあつたから、六十一、二三であつ」

「六十二三に近いやつや」

「まだ老こぼれるには早いと想つが……」

「そなた、少しば口を慎め」

「やういわれるが大臣閣下。俺にはそつとしか思えませんし、そつとしかいえませんよ」

「憶測でものをいつでない、といつてあるのだ」

「それが、やうともいえません」

「……どうこいつとか?」

「聞くところによると、アルグレイブ国王は大祭の後、離宮を建たれ、住まいをそちらに移されたそうにいります。はずすことのできない式典や場には、王宮に戾られ、姿をあらわされるとこつことですが、それ以外のときは、離宮に引きこもつておられるとか……。」健康に不安がある、と囁かれてあります」

「ほお、で、政務はビビつしてこるのだ？ と話くまでもないな」

「黒の宰相か？」

「セヨウヒドリヤゼニサマア」

「ちつ、予想以上の悪風だ」

と男が毒づいたとき、謁見の間につながる扉が開かれた。

男たちが一斉にそぞりを向く。

「……」

控えの間に入室した男は、剣呑な空氣と視線を浴びて、一瞬、怯む様子を田元に見せた。が、それを即座にしまいこむと、男たちに告げた。

「お待たせいたしました。準備が整いまして」やこます。貴様には、謁見の間にお移りいただきますよつ

それを聞いた男たちは、無言でうなづき、立ち上がった。その表情は、濃淡の差こそあれ、いずれも険しく厳しい。

「バルダとレナー・テの関係が変わるか……」

「どう変わるかはわからんが、変わることだけは確かなようだな」

「正しくは、変えられる、だ」

男たちは控えの間を後にした。

バルダ王国は、大陸の果ての大國、と呼ばれている。

豊かな森と、大小含めると三百はくだらない数の湖を有するこの国は、その美しさから、『神々の休息の地』ともいわれていた。

美しいだけでなく、そこからもたらされる自然の恵みは、バルダを潤し豊かにしていた。そしてなにより、バルダに恩恵を与えているのは、西の空に、南北に聳え立つセルスカーの山々であった。ひとの踏破を許さぬ天険は、外からの侵入を阻むだけでなく、内なる野心をも碎いてきた。

地理的なものも大いに関係しているが、バルダは大陸にあって、勢力を拡大させることもなければ、縮小させることもない、非常に珍しい国であった。彼らは領土の拡大ではなく、豊かな領土を守り、そこで富と力を充実させることに心血を注いできた。

賢明の国である。そして王は篤実であった。

建国より続くバルダ王家は、傑出した人物こそ出しあしなかつたが、國を脅かすような愚昧な王も出さなかつた。王家に受け継がれる血か、はたまた教育の賜物か。歴代の王はそれぞれ、篤実であつたり、清廉であつたり、地味だが國を守り固めるにふさわしい資質を有していた。

現国王カルスナムも、派手さはないが、冷静で物堅く、必要があれば相応の判断と決断のできる人物であつた。歴代の王たちと同様、領土拡大の野心はない。ただ、内陸の動向には強い関心を持つていた。

時に急速に、時に緩やかに、たえず移ろいゆく内陸の国々の動向を、彼は用心深く見守っていた。自国が内陸の嵐に巻き込まれないよう、心鋭く、目を光らせているが、国王カルスナムの瞳は穏やかで、見るものに安堵を与えていた。そしていまこのときも、呼び寄せた王太子を迎えた国王の濃茶の瞳は穏やかで優しかった。

「ガイはどうしたのだ？」

カルスナムは息子に笑みを向けた。

息子ソヴィエの片側にいるはずの人物がいないことを訊ねたのだが、ソヴィエは母譲りの白皙の美貌に薄い苦笑を浮かべただけだった。

「申し訳ありません」

と頭を下げたのは、常にソヴィエの傍らにあるギルスだった。

「どこへ行つたものやら、行方がわかりません

広い肩幅のわりに肉付きの薄い長身の青年は、そういうて穏やかな笑みを見せる。

「「」のよつな大事なとおり、殿下のお側を離れるなど」

「よこではありませんか宰相閣下。此度の会見に、あれは必要「」や
らん。なにかとつねそう「」やれば、逆にいなくてよかつたところべ
きでしょ」「

国王の隣で舌言を吐くブルヌに、ギルスはそう答えた。

「……まあ、そうであるな」

ブルヌの声を聞いて、カルスナムが笑つた。

「そうか、ガイはいらぬか」

王は、気持ちよく同僚を切り捨てた青年に目を向けた。

「此度の会見には不要で」「それこまか」

明瞭な声が、抑揚をつけてそついた。
ギルスの返答に含みを感じた王は、笑みをしまつた。

「レナー・テとの会見に、ガイはいらぬといつ理由を申せ

「はい。わが従兄弟は才覚深い男ではござりますが、國を想うこと篤く、王太子殿下を想うは、さらにそれを上回ります。そのような男を同席させるのは非常に危険です」

「それは、ソヴィエトの癌のことについておるのか？」

カルスナムは息子に目をやった。

王太子の秀麗な顔には、青黒い痣があつた。忌まわしい色のそれは、左耳の付け根からあごにかけて広がり、左肩にまで及んでいる。端整な面を覆う痣は、闇が光を侵食するがごとき禍々しさを、見るものに「見えるのだった。

「そのような心配は無用である

王は断言した。

王太子と会つたものは、必ず何かしらの感情を見せる。同情や憐憫、恐怖など、時にあからさまであつたり、必死に抑えようとしたり それはもう、多種多様に感情を見せるのだ。生を受けて以来、それらに晒されてきた王太子は、多少のことでは動じない。傷つく時は、もつ過ぎた。

「そうであるう、ソヴィエト」

息子に向けるカルスナムの眼差しは優しく、深い愛情がこもっていた。

ソヴィヒは父王に応えるように、田元を和らげた。

父譲りの濃茶の瞳と、同色の髪。少し癖のあるその髪は、まるで痣を晒すかのように短い。

「まわしに痣を『えられながら、心に闇を巢食せぬ』ことも、逃げることもしない息子を、王は誇りに思っていた。他国の使者がどのような反応を示そうとも、問題はない。加えて、今回の相手は大国レナー＝テである。

「レナー＝テの重臣であれば、そなたの心配するようなことはならないだろ？」「

「わたくしが心配してこむのはやのうでせ」「やれこません」

ギルスは首を横に振った。

「陛下のおひしゃるとおつ、レナー＝テの方々であれば、やうらの心配はなこでしよう」

「では、何だといつのだ？」

「レナー＝テが、われらバルダに求めるもの……」

「ギルス、そなたにそれがわかるか？」

「おや、ひぐ

言葉は控えめだが、ギルスの声には自信からくる強さがあった。カルスナムは無言で頷き、先を促した。

「閣僚の方々は、領地の割譲か、はたまた兵の要請か、と氣を揉んでおられるようですが、レナー・テの望みは、ソヴィエ殿下でございましょう」

カルスナムとブルヌが顔を見合わせる。

「何故、そう思つ」

王の問いかに、ギルスは答えた。

「レナー・テは大国でありながら、大欲を抱かぬ常識と良識の国でございます。ビージャの国と違つて、我欲のままに領土を欲する国ではありません」

ギルスの揶揄に、ソヴィエ王が微笑んだ。

「ビージャの国とは、ビージャのことだ?」

「茶々をいれるな」

ギルスは凛々しい眉をひそめてソヴィイ王をけん制するビ、頭を下げた。

「失礼しました」

「よい、続けよ」

「色々な噂は飛び交つておりますが、国内は安定期しております。いまのところ、周辺諸国にも目立った動きはなく、問題もありません。となると、考えられるのはひとつ。確かに、シャンキルの女神には、忘れ形見がいらしたはず」

「婚儀といつわけか」

ギルスは深く頷いてみせた。

「陛下のみならず、ソヴィイ王殿下をひととせり黒の宰相がいわれたのは、そのためでしょ？」

「であるつむ

ため息に似た声で、王はそうこつた。

「大国同士の絆を深める婚儀。喜んでお受けしたいといひますが…」

…

言葉を濁すギルスに、

「断る」とはできません

王は静かにいい切った。

「さよう。断りたくとも、われらは断ることができません。断ることができない以上、先方の申し出を速やかに受け容れることが大事となりましょう。渋り、迷いを見せるは、レナー・テの心情を損なうだけで、われらには何の利にもなりません。ガイが要らぬ理由にござります」

「よつわかつた」

王は肯くと、ソヴィイエに目を移した。

穏やかだった瞳が、厳しい王者のそれになっている。

「ソヴィイエ、われらはレナー・テの申し出を受けねばならん。承知してくれるな?」

「無論どうぞいます。父上」

声は大きくなかったが、決然と、ソヴィエトはいった。
今年二十四歳になるバルダの次代の王は、重責と過酷な試練に遭
いながら、心身ともに逞しく成長している。

「ソヴィエト……」

「はい、父上」

しかし、カルスナムはいいかけて口をつぐんでしまった。王ではなく、息子を気遣つひとりの父親の田で、ソヴィエトを見つめる。

「父上」

父王の心情をわかつたものか、ソヴィエトが口を開いた。

「王者に限らず、上に立つものは迷いを見せてはならぬ。内で迷う
はいいが、決して外に見せてはならぬ、と教わりました。教えてく
ださったのは、父上でどうぞますよ」

「ああ、やつであったな。そつであった」

カルスナムは、内に潜む迷いを振り捨てた。

「陛下、そろそろ謁見の間に向かいませんと」

ブルヌが控えめな声を出した。

「その前に、お願いしたい」とがんざいます」

「なんだ？ 今までなくてはならんのか？ ギルス」

ブルヌは青年を見上げる。

「はい。陛下、よろしいですか？」

「かまわん。申せ」

「承諾を得たギルスは、感謝の礼を示すと、小ぶりな宰相に向き直つた。

「これは宰相閣下へのお願いでござる」

「何？ わしか？」

「さよひ。閣下には、会見の後、閣僚方々の説得をお願いいたします。ガイは、わたくしが引き受けますれば」

「何？」

まだ、会見より先のことを想像していなかつたのだから、ブルヌの驚きの表情を見て、ギルスは態度と言葉を一変させた。

「じじ様」

と、目に涙みを見せて、ブルヌに顔を寄せる。

「ぼーつとしていてはなりません。われらはレナー・テの申し出を受けるのです。閣僚方は陛下と殿下の手前、会見の最中はおとなしくしておられるでしょうが、会見後、彼らは不平不満を噴出させましょう」

ギルスの発言に、ブルヌは「つづ」「つづ」と言葉を詰めさせた。

「よもや、陛下と殿下にその役目を負わせよつむじと、じじ様はお考えではないでしょうな？」

凄むギルスに、またもやブルヌは声を詰まらせる。

「陛下と殿下は決断し、その責任を負われるのですぞ。われらが雑事を引き受けはるは、当然ではありますか」

「わ、わかつてある

「それともあれですか？ ガイの方がよろしいか？ じじ様がガイを引き受けてくれるところのなら、俺は喜んで閣僚方の説得にあたりますよ。あやつのことですから、それはむづ轟々ねちねちと、じじ様を責めることでしょうなあ」

「な、何をいう。宰相のわしが閣僚を説得せんぞどうするー。ガイはそなたに任せせるが。よこな？」

「な、何をいう。宰相のわしが閣僚を説得せんぞどうするー。ガイはそなたに任せせるが。よこな？」

「承知つかまつりました、宰相閣下」

ギルスは端整な面に笑みを浮かべ、深々と頭を下げる。

「ブルヌ、良い孫を持つたな」

「とんでもございません！ 賢しくいつもおこだけの孫にござります！」

カルスナムの笑声に、ブルヌは半ば謙遜、半ば本氣で首を振った。

謁見の間は、白の間ともいわれる。

白塗りの壁に天井。床には白大理石が敷き詰められ、上下二段に大きくとられた窓から差し込む外光が、さらにその白さを輝かせる。調度品も白を基調としたもので統一されており、唯一あるのは、太い柱に走る数本の細い青だけであった。

白はセルスカーの頂にある万年雪を、澄んだ青は、セルスカーの空をあらわしている。セルスカーの清冽な白と青は、バルダの色であり、氣質の象徴でもあった。

まぶしいほど白さでもって、来入者を驚かせる謁見の間では、すでにバルダの高官たちが、いまや遅しと、レナー・テの使者たちを待ち構えていた。ついさきほど国王と王太子を迎えて、バルダの人員は揃っていた。

窓を背に並び立つ十名の高官たちは堂々と胸を張り、

唯々諾々と従つてなるものか

と見えない氣炎をあげている。氣勢も前のめりに、顎をあげる高官たちは、目だけをわずかに動かして、前に座る主たちの様子を伺っていた。

主たちの様子はいつもと変わらなかつた。

一緒に入室してきた宰相はなにやら難しい顔をしていたが、王と王太子は高ぶるでなし、恐れるでもなし、緊張の色さえ見せず、普段どおりの穏やかさと静けさであらわれたのだった。

会見に臨むにあたり、王からなにか言葉があるだろつと思つていたがそれもなく、高官たちは安堵と若干の肩透かしをくらつていた。

(どうこうとか?)

(頼もしいではないか)

(内々に話があつたのか?)

高官たちがそれぞれ田にものをいわせている間に、レナーテの来訪が告げられた。

男たちは姿勢を正し、視線を扉に向けた。

レナーテの使者たちは、入室すると一様に田を細めた。

だがそれはほんのひと時のことと、室内のまぶしさを過ごした彼らは、憎らしいほどの落ち着きと、悪口を叩く隙もない完璧な礼でもって、バルダの前にあらわれた。

「掛けられよ」

カルスナムが座を勧めると、ふたりの男が肯首し、バルダの君主と向かい合う席に着座した。

残りのものは彼らより一步下がつた場所から動かず、両脇においていた手を、その場で後ろ手に組み変えただけだった。自国の重臣を守護するように立つのは、みごとな金髪と銀髪の、見目良い青年たちだった。会見に臨むレナー・テの人間は、わずか四人だった。

バルダ側は、高官、廷臣だけでも二十名を越す。加えてその大多数が悪感情を抱き、無言ではあるが、それを隠そうともしない表情と眼差しを彼らに向けている。というのに、レナー・テの使者たちは一切感情を見せなかつた。

まだ二十代半ばと思われる青年たちの若さと人目を引く容姿から、

（派手な飾りか……）

とバルダの高官たちは思つたが、彼らはその印象をすぐさま捨てた。

正面から向き合う形になつた青年たちは、多くの視線に晒されながら、決して無表情を崩さない。そのくせ目には力があつた。均整のとれた身体を適度な緊張感に包み立つ彼らは、成り行き次第でいかようにも心身を変化させられる そんな余地すら見せていた。

年に似合わぬ余裕をかもし出す青年たちの前には、レナー・テが誇

る将と宰相が並んで座っている。それぞれが武人文人の最高位にある彼らは、自然体でいながら、並みならぬ威厳でその場を圧していた。

レナー・テ軍の頂点に立つ大將軍ロングバルトの威風は、いうに及ばず。文官でありながら、それに負けない威を放つのが、レナー・テの宰相グレンだった。その姿には、武人の強さがある。横に座るロングバルトに見劣りしない体躯は逞しく、黒の長衣が精悍さを引き立てていた。

グレンが切れ長の目で、バルダの高官たちをひと撫でした。

冷たい視線を向けられたバルダの高官たちは、眉間に険しさを見せたが、グレンは無表情のまま、視線を真正面に据えた。そこには、バルダ国王カルスナムがいる。

おもむろに、グレンが口を開いた。

「レナー・テ王国宰相グレンにござる。」

「ロングバルトでござる」

絶妙な間で、ロングバルトが割り入った。

グレンがかすかに眉を顰め、ロングバルトを見る。

ロングバルトは口の端をわずかに上げると、すぐにそ知らぬ顔を決め込んだ。

グレンは何事もなかつたように、視線を国王カルスナムに戻した。

「此度は、国王アルグレイブ陛下の命により、臣らが参りました」

それだけをいふと、彼はカルスナムを見つめたまま、それ以上何もいおうとしなかった。
しばしの沈黙の後。

「して、用件は？」

カルスナムが水を向けた。
この言葉を待つていたのか、グレンは深く頷くと、視線をカルスナムから王太子ソヴィエに移した。

「アルグレイブ陛下より、王太子ソヴィエ殿下への言伝でござる」

バルダの高官たちの顔に、怪訝の色が広がる。
グレンはいった。

「レナー・テの至宝を、殿下にお譲りいたす」

(レナー・テの至宝?)

謁見の間は、声のないざわめきに揺れた。

領土か金か人間か いずれかをもぎ取られるか、差し出すこと
を強要されると信じて疑わなかつたバルダの高官たちは、虚を突か
れた。

奪われるのではなくにやらぐれるといつ。

しかし、『レナー・テの至宝』というのが、彼らにはわからない。
比喩であることはわかつたが、それが土地なのか権利なのか、人な
のか物なのか、突然掛け金をはずされた状態の頭では、情報が騒が
しく空回りするだけで、これというものが見つからない。

バルダの高官たちは、至宝が何を指すのか、答えを探すように目
を見合わせた。だが、見返す目には同様の疑問があるばかりで、答
えはない。一部、答えを見つけたものもいたようだが、彼らはそれ
ぞれ考へに沈んでいるようで、視線を寄こさなかつた。そんなとき、

「ありがたく頂戴いたします」

ソヴィイ・Hの声を聞いて、彼らは驚いた。

レナー・テの使者たちにも、王太子の返事は意外なことのようだつ
た。無表情だつた彼らが、表情を見せた。

軽く目を見張る青年たち。ロングバルトは眼差しを落とし、口角を上げており、その隣では、グレンが切れ長の目を細め、あるかなしかの微笑を口元にのぼらせていた。

「わが主も喜びましょ」

グレンが頭を下げた。

「 したが、どちらのお方か？」

カルスナムが問いかける。

とまどひ高官たちを置き去りにして話は進んでいくかにみえたが、カルスナムの次の言葉で、彼らはレナー・テの至宝が何であるかを知つた。

「シャンキルの女神の忘れ形見は、確かに一方いらしたように思うが」

バルダの高官たちが驚きに目を見張る、と同時に、グレンが口元の笑みを濃くした。

「さよう、忘れ形見はおふたりにござれる。ソヴィエ殿下にはアルテイナ様をと、主は申しておりました」

「宰相閣下、此度の話は内々に進められていたのでござるのか？」

ギルスの危惧したとおり、高官たちは不平をぶつけてきた。

レナー＝テとの会見は、身内の疑惑を呼ぶほどに、滞りなく速やかに終了した。

バルダの快諾を得たレナー＝テの使者たちは、余談に花を咲かせることもなく早々に引き上げ、カルスナムとソヴィエも謁見の間を後にしている。

ここまでギルスの思惑通りだつたが、ギルス本人がこの場から逃げ遅れてしまった。

まいつたな

ギルスは心中で呟きながら、席をはずす機会をつかがっていた。

「それはあるまい。内々で話が決まつていれば、使者のやり取りをすれば済むだけのこと。どのように武を誇示するようなあからさまなやり方はすまいよ」

「しかし、陛下と殿下はわかつておられたな。でなければ即答できまい」

「ギルス、そなたもわかつてていたのであるまい？」

気配を殺していたギルスであったが、嵩高い と従兄弟から嫌味を込めていわれる彼の身体は、人目から隠せるはずもなかつた。厳しい視線を向けられたギルスは諦め、レナー・テの目的に見当をつけ受諾を進言したことを、正直に話した。

あからさまに不満を見せるものはいなかつたが、咎めるような目がいくつかあつた。

「お主の田の良さはわかっている。確かにこともな。だがな、このことは、いま少し時間をかけて考える必要があつたのではないか？」

わしはそう思う といったのは、バルダの老将軍ブラスバだつた。若くから賢将と呼ばれ、六十五歳を過ぎたいまも、退くことを許されず、バルダの軍権を握る人物である。

彼は、ギルスたちの祖父であるブルヌと親交があり、ギルスにも目をかけてくれる。ひょつとしたら、この老将軍が理解を示し援護してくれるのではないか とギルスは淡い期待を抱いていたが、甘かったと思い知らされた。その上、この場から逃げる機会を完全に失つた。

ギルスは腹をくくつた。

「閣僚諸将の方々に、『ご説明と』ご理解を求める時間がなく、かようなことになつてしまつたのはお詫びいたします。しかしながら、先も申し上げたとおり、われらには選択の余地がございませんでした。レナー・テがあのよつた武威を見せるのは、断つてくれるなという意

思表示でありますしょ。」ねて時間を稼ぐことはできても、結果を変えることはできません。変えるためには、それこそ多大な犠牲を払つ」とこなりましょ」

ギルスの声で、高官たちは静かに現実を見つめる。

「かつて、われらバルダとレナーテの国力には、そつ差はございませんでした。ですがいま、その差は歴然としております。それでも従うを好しとせず、誇り高きバルダの民として、大国に立ち向かわれますか?」

顔をしかめる諸将たちに、ギルスはさりに続ける。

「レナーテが無理難題を示すのであれば、わたくしも剣を抜くことにためらいはありません。しかし、ことこの件に関しては、やり方はさておき、犠牲を払つてまで拒否しなければならないことでしょう?」

「わかつてある。わかつてあるよ、ギルス」

老将軍が白い頭を揺らした。その声は穏やかで、次第に熱を帯びるギルスの声と感情を優しくくるむ。

ギルスは息を吸い、我知らず高まつていた感情を落ち着けて、老将軍の声に耳を傾けた。

「もはや決定されたこと。王太子殿下が承諾し、陛下もそれを了承された。われらが何をいおうと事態は変わらんし、変えられん。だがな、いわすにはおれんのだ、ギルス」

それは、ギルスにいいながら、他の高官たちにいい聞かせているようでもあった。

「ソヴィエト殿下は、お幸せになれるのであらうか?」

ギルスは答えることができなかつた。

王宮の自室に戻つたギルスは、長椅子に腰を下ろし、脚をテーブルの上に投げ出した。体はまったく疲れていないといつのこと、ひどく疲弊していた。

きつくる眼を閉じる。

しかし、心が休まることはない。逆に、乱れ騒ぐという好ましくない事態を招いてしまつた。老将軍の言葉に、ギルスは打ちのめさ

れていた。

ソヴィエト殿下は、お幸せになれるのであろうか

幸せになつてもらいたい。それは強く願つてゐるし、心の底から思つてゐる。が、幸せになれるかどうかはまったく自信がない。儀儀に関していえば、一筋の光さえ見えないので、腹の立つこと、不安要素だけは山ほどあつた。

ソヴィエト個人が犠牲になることで、國に利がもたらされるのであれば、まだ納得もできる。だが、それすら確かではない。

「できるものなら突き返してやるわ」

思わず口から出た言葉に、返事が返つてきた。

「返しへこくな、俺も一緒に行つてやるや」

声のする方角に顔を向けたギルスは、眉根を寄せた。

いつの間に入り込んだのか、ひとりの青年が、壁に背中を預けるよにして立つていた。嫌味なほど整つた顔に、微笑を浮かべている。

立ち姿も画になる青年は、足元に落としていた視線を拾い上げるといった。

「従兄弟のよしみでな」

ギルスは内心で舌打ちをした。
いま最も会いたくない人物、それは従兄弟のガイだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1249w/>

神々の賽　～対の女神～

2012年1月10日21時49分発行